紹介

栄原永遠男・西山良平・吉川真司編『律令国家史論集』

本書は二〇〇七年に亡くなられた京都大学文学部教授鎌田元一氏を偲んで、氏の同級生、後輩、受業生らが寄稿した追悼論文集である。総勢二八名の執筆者たちが多彩な研究テーマでそれぞれに論考をまとめている。鎌田氏は一貫して「律令国家とは何か」という大きなテーマを追い続けていた。その妥協の無い質実剛健な論証によって、多くの人々がより豊かに古代社会の実像を思い描けるようになったのである。本書は早逝してしまった、厳峻であり、かつ温柔であった先覚へ贈る追福の書である。

本書の構成と執筆者（敬称略、本書掲載順）は以下の通り。

第一章　ヤマト王権から律令国家へ

律令国家が成立する前段階の論考を集める。大化前代、改新前後の政治的権力の動向や対外関係、部民制論、大化の東国国司などを扱う。思えば鎌田氏が最晩年に精力的に取り組まれたのも当該期、紀年論や四度公文などであった。執筆者は俣野好治、黒田達也、中田興吉、笹川尚紀、吉川敏子、李在碩。

第二章　律令国家と王権・都城

浄御原令以降の時代を扱う。律令が継受され、日本社会で咀嚼され、解釈される中での、都城と王権という視点から国家の秩序を解明する。歴代遷宮や都城内の整備、都城と古道、令前・令制官司、祖先祭祀、喪葬など。執筆者は舘野和己、告井幸男、虎尾達哉、橋本義則、堀裕、櫛木謙周、西山良平、吉川聡。

第三章　律令制度の展開

令制下での実際の行政がどのように行われていたのか考察する。文書行政の実態、課役・雇役などの経済史、地方財政、軍制、法制等主題は多岐にわたる。執筆者は吉江崇、加藤麻子、吉野秋二、竹内亮、佐藤泰弘、毛利憲一、寺内浩、前田禎彦。

第四章　古代寺院の諸相

本章では一括して寺院に関する論考を扱う。前三章に比してより具体的な章題だが、内容は変わらず幅広い。寺院史の範疇に留まらず、御願寺や仁和寺・雲林院など王権に直結する事項も多く扱う。執筆者は吉川真司、今津勝紀、栄原永遠男、本郷真紹、古藤真平、遠藤徹。

主題を「律令国家史」としているため扱う時代は大化前代から平安後期に及び、考察の材料が近世にまで及ぶものすらある。本書を通観すると、これだけ多種多様な論考があるにもかかわらず、多くの執筆者が鎌田氏の論文を参考文献に挙げていることに気がつく。鎌田氏の研究の幅広さ・深さを改めて知ることとなる。そして本書は、今後の律令国家史研究の更なる深化に資するところが多くあるであろう。

（A5版　五八七頁　二〇一〇年二月
塙書房　税別一六〇〇〇円）

（沼田美季　京都大学文学研究科博士課程後期）